「シリーズ　失語症当事者会を知る：第２回　病院卒業生の会『元気でやってる会』
社会局成人福祉部　」

前号より、成人福祉部による当事者会レポートを掲載しています。今回は「病院での入院生活卒業者の会」の１つを３名の部員が取材しました。

町田市にある多摩丘陵病院では、２５年来、同院で入院生活を終えられた方々のための失語症者の会を続けています。最近では噂を聞きつけて、退院患者さん以外の失語症の方々も参加されているそうです。普段は福祉センターの一室で開催されていますが、今回は年に１回のクリスマス会ということで、会場は近隣のレストラン（NPO 法人が経営する就労継続支援 B 型施設）でした。２時間借り切って、会員、ご家族合わせ総勢５０余名が集まられました。

会のプログラムは、隔月開催の会とのことで、ここ２ヶ月の間にお誕生日を迎えられた方々へ「ハッピーバースデー」の歌のプレゼントから始まります。そして、皆で「冬景色」「きよしこの夜」の斉唱、ケーキを食べながらの歓談、ST が準備した全体ゲームへと、会は進んでいきます。

今回のゲームは、「すきやきゲーム」のクリスマス版。１チーム１０人程度の５チームに分かれ、チームごとに皆が「父」「母」「子」「祖母」「祖父」などの役割を割り振られます。まず５チームの「父」達が ST とじゃんけんをし、ST に勝った「父」は隠し袋の中から１枚オーナメントを引き、用意されたクリスマスツリーに貼ります。次に「母」たち、「子」たち、と順に ST とじゃんけんをして、ST に勝つたびにオーナメントを獲得し､5 種類あるオーナメントをすべて揃えたチームが勝ちとなります。いくらじゃんけんに勝っても、袋の中から同じオーナメントばかり引いてしまってはツリーが完成しません。単純なじゃんけんゲームですが、誰でも参加でき、じゃんけんの勝ち負けだけでは勝負が決まらない面白さがあります。また、「きれいなお姉さん」「近所のオバさん」「イケメン学生」「謎の宇宙人」などの笑える役もあり、大いに盛り上がっていました。ST お手製のツリーが綺麗なオーナメントで飾られ徐々に完成していくのを見ているのも、楽しいものでした。最後にグループごとに記念撮影をし、２時間はあっという間に過ぎました。

ちなみに、普段の会合では平均３０数名が顔を出されますが、みんな話したくてウズウズしておられ、全員の近況報告とゲームで４時間を過ぎるのだそうです。

全員に素敵なクリスマスプレゼントがありました。普段の活動の中で、皆さんで力を合わせて作り上げた「ちぎり絵」のカレンダーです。ご自分の作られた絵を嬉しそうに指し示してくださった方がありましたが、どの月も季節を反映した明るい立派な仕上がりでした。

この「元気でやってる会」の発足は、平成２年、当時外来通院中の失語症患者の方が、「自分と一緒の頃に入院していた皆が元気にしているのか、会いたいなぁ」と呟かれた言葉がきっかけとのことです。当時は入院も長か

ったため、患者さん同士のつながりも濃かったようです。
　また、ST 自身も、外来でつながっていた方以外は、退院後の患者さんのご様子を知るすべがなく、失語症の方がご自宅でどう過ごされているのかが気がかりでした。そこで、ST が「同窓会」を呼びかけ、院内の教室を利用して茶話会が開かれました。これが好評で、定期的に開催することになったのだそうです。現在は、会員３１名、ご家族２７名、ST９名で活動されており、２２歳から８５歳まで多彩な顔ぶれです。

　２５年を過ぎても活動が途絶えることなく続いている秘訣を、たくさん学ばせていただきました。
　まず、「会長」「副会長」といった「役職」が無く、「できる人ができることを」というスタンスで、当会 ST の言葉を借りれば「当事者・ご家族・ST が、やんわりと役割分担」をされている、という点が挙げられます。PC が出来る当事者 A さんが会場予約解禁日にメールで仮予約を入れ、会場に出向くことができるご家族 B さんが本予約の手続きをし、当事者 C さんがお便りの表紙をワープロで作って送って下さり、病院に毎月届く D さんの絵手紙を表紙絵にして ST がお便りを仕上げる、といった具合です。
　また、この会は病院リハ卒業生のための会であり、会の事務局は病院の言語聴覚科にありますが、「病院の事業」ではなく、あくまでも ST 達が個人的におこなっている会という点も一つの特徴です。病院の事業でない分、ST の業務時間外の活動という負担もあることでしょうが、その分、無理せずに参加するという自由もあります。自分たちの考えることを実現し、会員の方と自由に交流できるメリットは大きいものです。たまには有志で飲みに行ったりされることもあるそうです。そうすることで、会員の方の「生の生活」を見ることができるのではないでしょうか。
　病院事業とは独立しているといっても、病院 ST リハでつながっている会ですから、外来リハも上手に活用されています。例会でのゲームは ST ミーティングで企画されますが、ゲーム作りの準備を外来リハビリの方に手伝ってもらわれることもあり、それを契機に何人かの外来利用者さんが集う機会を作られることもあるとのこと。皆で話し合いながら作業することはリハビリになるだけでなく、誰かの役に立てる喜びをも得ることができることでしょう。
　そうした中で、ST がいくら補聴器の必要性を伝えても「わかるから、いらない！」と言われていた方が、当事者の方同士の話し合いの席で不便を実感し、自発的に補聴器を購入されたということもあったそうです。また、外来の「訓練」を望まれない方でも元気会にはニコニコと参加されることもあった、といった、会の存在の意味が伝わってくる数々のエピソードを聞かせていただきました。

　お茶を飲みながら、何人かの方にお話をうかがいました。
当事者の方々からは、「別の病院で言語訓練を受けているが、そこはマンツーマンでの訓練で他の人と話す機会がないので、この会に来る意味がある。」「施設に入所しているので、この外出が何よりの楽しみ。」「いまの楽しみは、人と話すこと。」などの声が、またご家族からは、「病院のままのつながりを持つことができるから、同じ ST にずっと相談でき、安心。」「友人に認知症の介護をしている人などいるが、自分の夫がそれと比べてどうなのかがわからなかった。この会に来てみんな違うということがよくわかり、自分の夫の症状を理解できるようになった。」「来たい時に来ればよい、というゆるいスタンスに惹かれて通うようになった。子どもが小さく、会に参加したくてもできなかったが、少し

ずつ通っているうちに、専門家や他のメンバーやそのご家族から色々な情報をもらえた。また、同じような年齢で発病された方が会に入られた際に、支え合ったりメールで繋がって情報のやり取りをするきっかけになり、ゆる～く、やんわりと繋がっていくことができるので、続けてくることができた。」などの感想が出ました。

２か月に１回という頻度については、「自分としては丁度よく、無理をしないで通える頻度である気がする。」「初めは少ないようにも思ったが、続けてみるとちょうど良い。みんな何かと忙しい。」と、大方の方が賛成されていました。忙しい ST にとってもちょうどよい頻度のようでした。

最後に、多摩丘陵病院 ST から、今後、卒業生の会を立ち上げたいと考えていらっしゃる ST に向けて次のようなアドバイスを頂きました。

「まず、今いる患者さまにできること、ST が少し援助したら可能なことを使って、仲間づくりの土台を作るとよいのではないかと思っています。あの患者さんとこの患者さん、話が合いそうだなというのを見つけて、一緒に話す・協働作業をする・ゲームをする・歌を歌う・お茶を飲む…等の機会をつくり、ST は『仲人』になったつもりで　関わることから始めてみてはどうでしょう。

患者会とはこうあるべきという形から入るのではなく、あくまでもいま目の前にいる複数の患者さまが一緒に何ができるか、を考えるのがコツ。3 人寄ったら、すでにもうグループができると考えています。」

（文責：須田　悦子）